

第17回 (1999年夏期)

バングラデシュ 寺子屋訪問ツアー報告書



アジアキリスト教教育基金

〒169 東京都新宿区西早稲田2-3-18-26

TEL. & FAX. 03-3208-1925



エイセフ The Asia Christian Education Fund

1999

夏

Schedule

8/13 Fri	BG-073 12 成田発 (11:30am) ↓ 7ツカ着 (6:40pm)	♪	
8/14 Sat	SEPスクール訪問 (ミルポール地区 - セシ107スクール ラル711スクール モニ711スクール)		
8/15 Sun	New Market で 買い物 SEPスクールによる 講義 711タイム 日曜礼拝 - 教会へ行く	9	
8/16 Mon	SEPスクール訪問 (同上) 7ツカの博物館見学 アーロンで 買い物	8	
8/17 Tue	農村へ出発 Aチーム フォーバイル Bチーム ショールポール Cチーム カティラ	STAFF (ピリット アーロンズ) (Aエイト) (711-7. オム)	6
↓			
8/24	7ツカに戻る	♪♪	
8/25 Wed	シェアリング 農村の報告 (2711先生 登壇) SEPの生徒、各チームによる カルチャー show スクールを交えたの夕食	♪♪	
8/26 Thu	SEPスクールでの ディスカッション 711タイム お茶	♪♪	
8/27	BG-072 12 7ツカ発 (0:00am) ↓ 成田着 (2:00pm)	♪♪	

INTRODUCTION

1

A TEAM



ニハチさん



エリックさん



オロムさん



左から
EMI
YUKIKO
TAKA
AKIKO

右から
NIWA-san
MIZUE
MARUMI



アンブローズさん



アラムさん

へび

←へび使い
の人



アルパートさん

8
eight

DAYS in アーバール

8/17

1日目

アーバールへ。タツカから車で1時間程。
窓から見える景色はどんどん変わってく。
タツカの排気が"スガ"見わたす限りの
アーバールの自然へ。
豊かな感じにたおまると言っ
ていいのかな？
到着後、散歩に行き、いづみさんの
生活や家も見せてもらったり。
リキヤで エリックさんの家へ。
子供たちから"ア"と"ン"お花をくわたり。
すごくかわい。自然に笑顔。つら木村。

8/18

2日目

アーバールで"はじめての"学校訪問。
タツカの子に比べて"あ"シヤイ。
開いてはいたものの"遊ぶ"のか"け"
けこり大変。間がもたはたして
戸惑った。...
言葉も通じない。...
でも 大きなカマ はアーバールさん
のおかげもあり、かまの好評(=あはれ)。
もう何回できるの？
上手にできるかしら？
あ、ヒンズー教のダンス観た。
宗教の力、迫力を感じる。

8/19

今日は舟にのって学校へ行ったり。

木村の子はやっぱり shy だ。でも丸の分一組に
おそろしに、すごくおどけてくるのか？ 実感できてうれし、嬉しい。
タツカ 大人気!! 盛り上がります。みんなもか"んほ"てハトハト。
たのしい時をもらいました。
また、今日は エリックにも 連れて行ってもらいました。
生活のにおい、パワーがあります。とてもとても。
その後、"ア"つかいの"おじさん"来て、大々わま。
近所の子供も大人も 来た人も スタッフも 来-来-してました。
すわってたり...。丸くはしても 背中(?)の模様は アア みたい"かわい"な模様。

3日目

8/20

4日め

学校が"お休み"の日(→今日は Friday off)。舟に乗って島...まで"おで"かけ。
ヒンズー教の"ヒンズー"。DANCE に感激。丸が 宗教の力に...
みんなも一緒に"おで"たり!! 突然、子達の"おせ"もあり、額には汗を
やてももらたり。言葉は通じはたして staff の 通訳の"ア"と"ン"大変"ア"け。
丸でも"ア"の"ア"通い合うものはあるのでは...。月着手に思っているか(木村さん)
丸り思えたりはたして"ア"意味がある"ア"信じて。すごく早い。1日。お片づけ終了...

PUBAIL

8/21

今日も2つの学校へ。5か目

今日は空いておいた向うもたせかたに困った...

いつもいつも ちがう子供共に関わるのだから

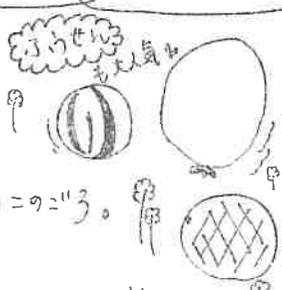
小貫水...で 何がしかのことも。でも先んずから思ひを言おう。

staffの人たちへ、いろいろ話して

盛り上がる。もっていろいろ話したい。最近1日がとても早く感じる。

本当に staffの方たちは 私たちのことを考えていてくれる。

誰もが 心から感謝して貰う。知らず知らずには大切なことを学ばせている毎日を実感。



8/22

今日は Sunday。学校お休み。

午前中は 教会へ。追加に打ち合わせに参る。

とにかく 歌が大好き。

宗教学に 好きな考え、やらえ方が 日本と全然ちがう。

信じるものに 心から 頼る (?) こと、先んずから 困難な中で も力強く 生きる 原動力の 1つに思っている (2)。

午後には SEP school の 先生たちが 50人くらい来て とても 楽しかった。お話しする。といても

全然 通じなくて も 一緒に話さう っていう 本心が 伝わって...

たけな お互い 分かりたい。矢張り たけな 気持ちよさがる 心から あったのは 不意なところ。

その後、サリー を着せてもらい、メンテ もやってもらった。

一生懸命、楽しんでくれて、私たちが 楽しめた ので、嬉しかった。みんな 別々の所...!? 楽しかった??

サリー はとても 可愛い。メンテ は 1時間 消えてしまっ...。

消えてしまっ... のが 手短か 2分 11 気持ちよさがる (2)。

とにかく 今日 素敵な 経験、先生方、staff に 感謝です。

6か目

8/23

7か目

今日は最後の学校訪問。

21日にきて来てもらった。

毎日 学校訪問 が 終わる

たけなには、1人1人の中に

様々な 反省や 後悔が

あったのも たけなは 2つだけ

いつもいつも 私たちは

子供たちから 大切なものを

たけなも 聞いて いたのだから

思っている。何かと 聞かれて 言葉

があるもので たけなは、

最後 いろいろ 話して

改めて 思った。

江アリの後、庭で

全員で 最後の夜。

ハングル & Japanese Song

大会、おまけ by 70人

お話し... 70人 70人。

充実した最後の70人夜

明日 帰ってあげよう

いけいけいけい...。

8/24

21日にきてもらった。今日は最後のpubail。8か目

礼拝で 朝食、散歩、おしゃべり、昼食、tea、X(12時)出発。

本当に 大切な時間。もって 2人 お話ししたり、子供共と

遊んだり、... (たい 気持ちよさがる みんなの中)。

先に 同じく みんなに 共通して いるのは お話しは 2人 staff、

木の 人たち、子供たち。70人 70人 いろいろ 村への 感謝の 気持ち

たけなも 聞いて、いろいろ 気持ちよさがる 感じ、本当に 大切な 瞬間を 過ごす こと、8日間 だった。うま 言葉で 表せて あげよう、決して 楽な 思い出 ではない、自分自身の 心から 出てくる 言葉。

ヒンズー教との出会い

丹羽輝子



6年ぶりのバングラデシュ訪問は、期待と不安に満ちたものでした。今回はプーバイルとの事、初めて訪れたプーバイルは、他の村と異なって垢抜けた雰囲気漂わせていました。スタディーツアーも回を重ねているためか初期の頃のように人々に囲まれることもなく、ホッとしました。今回特に心に残ったことはヒンズー文化に触れる機会を多く作って下さったことでした。幾つかのヒンズー教のお祭りに行きましたが、音楽と踊りと来た人たちに振る舞われるちょっとした食べ物がどこに行っても共通した事でした。賑やかな色に囲まれたヒンズー教の神様達はしっかり村人の心をつかんでいるようで、何人もの人がこの神様がいつも私たちを守ってくれているから何も心配はないと言っていました。一人の老婦人と話をする機会がありましたが、12才で結婚し、20才から子どもを産み始めましたが、その子ども(娘)たちも今はみんな結婚し、夫と二人の生活ですが、お祭りになると娘達が実家に戻り、家の仕事をしてくれるので楽ができ、それが一番嬉しいことと話してくれました。どの国でも同じだなと感じた次第です。夫が死亡すると結婚の時はめた白の腕輪を壊し額の赤い印と鼻の飾りは取り去らねばならず、縁なしの白いサリーしか身につけてはならず、一生未亡人で過ごすとの事。それに引き替え夫の方は、妻が死亡すると妻の持ち物は全部捨ててしまい、きれいさっぱりとして再婚をする・・・と聞かされ思わず日本語で「何ですって!!」と叫んでしまいました。彼女の顔はニコニコと何の不平もないようでした。夕方村を散歩していると左の方からは回教のコーランを唱える心地よい声が響き、右からはヒンズー教のカナカナという独特な霊と交わる呼び声が聞こえ、キリスト教も含めた複数の宗教が心地よく共存しているのを感じました。学校の先生達が50数名、午後一堂に集まりましたが、その交わりの時にも同じものを感じましたが、仲間同士の交わりを大変楽しそうにしている姿には、SEPのプログラムの成長が感じられ、資金援助が活かされていることを、子どもたちが教科書を抱え、机とイスにしっかり座って楽しそうに学ぶ姿と共に、はっきりと感じる旅でした。

小林 敬久

バングラデシュの生活において、人々は親切だったし、食事も旨かった。首都ダッカは汚かったが、農村の景色はなんとも言えぬ素晴らしいさだった。ずっと居たかった。本当に見るべきものは多かったのだ。しかしそれらのことは、私の核心には触れなかった。と言っても、何も感じなかったわけではない、好奇心を満たし、いつまでも頭の中に浮びあがる情景だ。

スタディーツアーによる、SEP との関わり。彼らの活動を見させてもらい、バングラデシュにおける教育の現状について説明を受け、活動の問題点などを聞き、さまざまな事、多くのことについて意見を交わし、話し合った。

小さな子供さえも、毎日、自分が生きるために働かなければならない。そのつらい状況が無くなり、子供たちが子供らしくあるため、そして、笑顔で遊ぶ姿がもっと見たい、だから活動を行っていると言っていた。私が思っていた子供というものは、たとえどんな災難に遭っていても、さわりだり、じゃれあったり、何もかも忘れ遊びに熱中になり、リアルな大人社会とは関係なくあると思っていた。しかし、違っていた。

貧しい国という認識は持っていたが、考えていた以上に本当に貧しいのだ。そんなごみの中には、価値のあるものは無いだろうと思うような中で、生きる糧を探していた。そんな生活の中にあり、経済的に生活を向上させる唯一のチャンス、それが教育だった。SEP は、たくさんの子供たちに教育を受けさせ、チャンスを与える努力をしていた。彼らは活動に彼ら自身の全てを費やしていた。

やはり、私の核心に響いてきたものは SEP のあり方であった。彼らの訴えは、直に響いた。そして、教えられたことは多く、本当の自分を思い出した。それは、結局自分を見つめ直したということになるのだろう。しかし、見つめ直したありのままの自分をどのようにして持ち続けて行くのかということがさらに重要なことであった。そのことは、ACEF・SEP の活動のように大きな意志を持ち、努力をして行くことに習えればと思う。

SEP のスタッフは、この私でさえも助けになることが出来ると言ってくれた。今まで素直に助けを求められたことなど無かったので、純粹にうれしかった。自分ひとりでは生きられないこの世界での助け合い。なにも出来ない私だけれど、よく見ればそこに、こんな私にさえも助けを求めている人々が居ると知った。私でさえも助けることが出来るのだ。そして、私が助けを求めたならば、いつでも助けてくれる。その関係の中で自分を見つめ、自分を認識することができ、自分の可能性を知った。



「寺子屋訪問 ツアーに参加して」

川那 恵美子

東京女子大学文理学部日文学科3年

「バングラデッシュにおける教育の現状を知ること」それが教育というものに興味をもっていた私がこのツアーに参加した目的であった。

ツアーを終えて月日がたつにつれ、自分にとってとてもいい経験だったとゆくり、しみじみと感じている。

ツアーの初日から私はかなりの不安を抱えていた。

私は性格上時間をかけないと人となかなかうちとけられないしどう接していいのかもわからないので、自分がなじんでいけるか非常に不安だった。バングラデッシュに到着し空港を出ると待っていた物乞いの子供達との遭遇に顔で冷静さを保つのが精一杯だった。

宿舎についても日本とのあまりの環境の差に、「なんでこのツアーに参加してしまたんだろう」と強烈な望郷の念に襲われた。

2週間、その時の私には1ヶ月にも感じられるほど長く思えた。

翌日からはじめた学校訪問。学校から花をもってニコニコしながら出迎えてくれたり、教室に入ると「こっちこっち」と満面の笑顔で席に招いてくれたり、一生懸命になって英語で話しかけてくれたり。

子供達の無邪気でくたくたのない笑顔で私の緊張はかなり知られた。

バングラデッシュでの生活にやと慣れ始めた時、私はプーバイルに出発した。

どこまでも続くレンガの道や風になびく緑の田んぼ。村の人々の様子。

貧困という言葉にまとりつく惨めなイメージはそこになかった。

プーバイルは美しかった。なにか心をホッとさせてくれる所だった。ここですごした

一週間、私は心身共に開放感あふれる気分になれた。そんな気分で

経験した農村での学校訪問、ヒンター教の礼拝、スタッフとの話しあい、

全てが私の心に強く残った。子供達や先生とうまくコミュニケーションができなくて戸惑ったり、人に迷惑をかけた、学校で改善しなければならぬ現実を目の

あたりにしたりと全てが明るいことばかりではなかったが

それを受けとめることも私には重要な事だった。思い出して後悔することもたくさんあるけれど「また行きたい」と思わせてくれる

国だった。全てにおいて鈍が、いた私に活力を与えてくれたこと、

また改めて自分は教育ということに大変興味を持っているということも

確信させてくれたことをとても感謝している。



7

スタディーツアー報告



自分のみてきたものを、どう
言葉にしたらいいのかわかりません。
すごくむずかしい。

私は、ツアーに参加してよかった。
あの2週間、私は今までで1番いい
自分でいられた気がします。いい人間でいられた。
よく食べてよく寝て、歩いて走って遊んで歌って、たく
さん話して、いつも考えていた。目の前のすべてに夢中で、
精一杯で、たのしんでいた。

自分がどういう人間だったか、思い出した。
あー、たのしかったなあ。すばらしかった。

いつもACEFの存在を感じていました。これまでに、
たくさんの方がゆっくり時間をかけて築いてきたバングラ
デシュの人々との信頼関係に私たちはいつも守られていた。
なぜあんなにもあたたかく私たちを迎えてくれたのか、
その理由はそこにあって、同時にあの私たちの2週間も、
次への基盤になってゆく。

時間はある。
時間はあると思った。私には時間がある。体も動く。

この先、自分がどんな道を選ぶかまだわからないけど、
どんな道を選んだとしても、私はバングラデシュのことを
忘れることは出来ないと思う。あの地にあの人たちが生き
ていて、今も私と同時に動いていること。

でも、まだ、これがすべてじゃないと思う。

知るべきことは山程ある。それにすら気づかなかった。
気づけてうれしい。

時間が経てば経つほど、自分の中であの2週間がいかに
大きいものなのかがわかります。それはふくらむ。

必ず、なにかします。

“自分を見つけて”

東京女子大学1年史学科
関山 瑞夷

2週間、この短い期間で体験したことが、自分にとってと“れほど”貴重なものであるが、改めて考えさせられます。

バングラディッシュで私は価値観を覆えされ、自分というものの存在をちっぽけなものと思いと同時に自分を失いました。日本を発つ前、またツアーの前半、バングラディッシュを貧困の国としてしか見ていなかった（実際空港に降りた時、物乞いの子供たちが逆ついできた）私は何か使命感のよちなものをもっていました。寺小屋を訪問した時、バスの中から外を眺めつつ、“私はこの国に何か”できるだ”ろ、何をすべきだ”ろ”と考えることがたぶたぶありました。しかし、日数がたつにつれ、それが単なる好意の押し付けであることに気付いたので。フルタイムで私は“生きている”ということを実感しました。大地から、またそこに生活する人々、動物を通じていつも感じることでした。ただ“自然”があるというのではなく、大地とともに生きる人々を見て、ボランティアと使命感をもっていた自分が取いかしくなり、また自分という存在のあまりの小ささに打ちのめされました。そんな時、スタッフの方が“あなたはこのバングラディッシュで自分を見つけなさい”と声をかけて下さいました。この言葉のおかげで私はバングラディッシュに、そこに住む人々の生活に溶け込めることができたのだと思います。それからの日々は全てにおいてリラックスした状態で接することができ、素直に物事に感動することができました。これらの体験を通じて私は自分が無色透明に、自分を失った気がします。しかし、それが自分を見つけることのファースト・ステップだ”という確信があります。これからも私はバングラディッシュと関係を持ち続けたいと思います。

そして、その関係を通してかえりつ”自分を見つけていきたい”と思いました。



スタディ ツアー を終えて

武田 まるみ

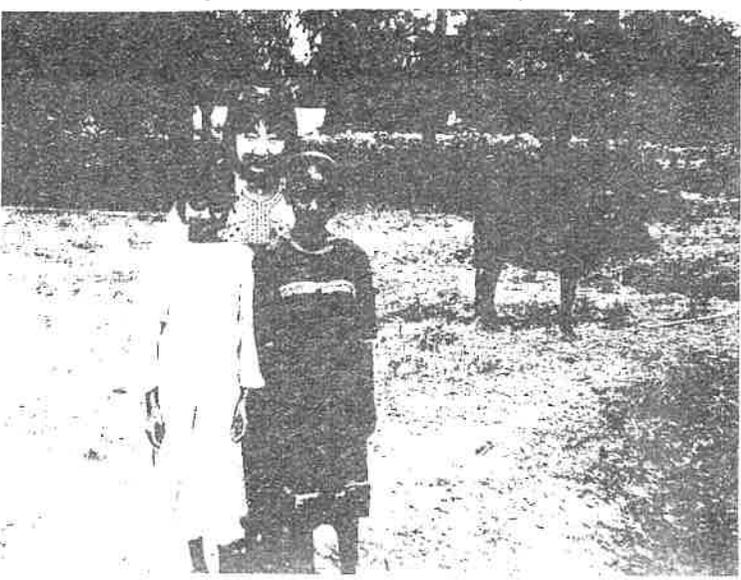
どこへ行っても感じたことは、人の持つ生きる力の迫力と、人と人の関わり合
 でした。人間や人の他者すべてのものの強さ強さ 生命への力は、未知に。
 自分やまわりのものを再認識させる機会を与えました。バンクラティ
 にいる時は、毎日のすべてが新しく、光が木 深い意味を持っていて、
 自分の中で、1つ1つへの考えを 消化し 出来ていなかた気がします。
 考える機会が少なかったものの、現実が目の前にあっただけに、
 いろいろな気持ちや 混ざって 困らしていったのだらうと思います。
 普段どきに"けい"の目さしと使われていたが、目先のことしか
 見ていなかたかといろいろと"感じ"られました。

毎日たくさんの人、こと、ものに会いました。困難にも前向きに
 逃げることはなく進んでいるバンクラの人と 困らしたもので、2週間
 体馬を、本当にずっと忘れたくないです。これからの糧として大切にしてい
 体馬を 単なる 感動や よい思い出... といろいろと"終"らせることには
 してはいいと 切実に思っています。

また、日本に帰ってから分かったことが意外に多く、どきに"けい"のものをバンクラ
 からもらったことは見違わすきません。人の全てが"心"の中にある本質を
 表していることを 実感しています。

そしてまた、自分の気持ちを言葉で"素直"に表現することの価値と 大切さ
 を 痛感しました。心の、今まで"知ら"なかった"部分"に何か"入"ってくる
 気持ちは 誰か"感じ"たことと思います。その思いを表すことの、"何だか"
 分からぬ"さ"わさと、表すことが"でき"ない、もどかしさを感じました。さりと"ど"か
 で"ても"息を張っていたところがあったのだ"と"思います。日本に帰ってきて、バンクラ
 で"の"2週間と、自分を一度振り返ることが"出来"た時、気持ちの上で"の"
 行く前には"な"か"た"もの、お分らな"か"た"もの"が"発見"され、開け"は"おける、
 その"けい"は 気持ちです。

これから生きていく上で、人や、
 何からの新たな自分との出会い
 の時を大切にしていきたいです。
 常に生きていることを"感じ"
 生きている まわりのものを"また"
 "感じ"ていられる"けい"でありたいと
 思います。



みんなの憧れハモントさん

歌好き&家族好き

視界にない
不安なスーパー

ハモントさん



教育スーパー

ドスト=同志、友達
(男の人が男友達に使う言葉)

シヨフイークさん



10
ロク「セーヤー」のカンさん
ちょっとテキスト
ひげのスーパーバイザー



カンさん

大きないびき
おっとりシヨフイークさん

やさしい
オーガナイザー

舟戸先生

超体育会系 (ちえみ)
バセットさん
仲よし 704 709!?

カハラ大好き

ゆき
寝言「アロヒムスター」
(私の名前がエキゾチック)
素朴なゆき♡

フルート
700級
ルンギ大好き
母ハモントさん

バンガルー人に
バンガルー人?と聞
かれた
バンガルー人
るリン

モックレスとドストの仲
100%フルールさん

ひろえ

日本食大好き

モックレスさん

前スロー
バイザーの息子
ひろえとドストの仲



モックレスさん

ちえみの
相手を
モックレスさん



バセットさん

お母さん嫌いなスローバイザー
スローバイザー

ルビマおは
あかんひと一糸者
に美味しいカレー作って
くれるマデダさん
マデダの母
(ルビマ)

スローバイザー フルール 体験記

フルールフルールの母
ルビマおはちゃん
メンバー全員から慕う
かわいさばちゃん

マデダ&ルビマおはちゃん

働き者のモタレブ

私達のすべての世話と
管理をしてくれた
かっこいい
モタレブ

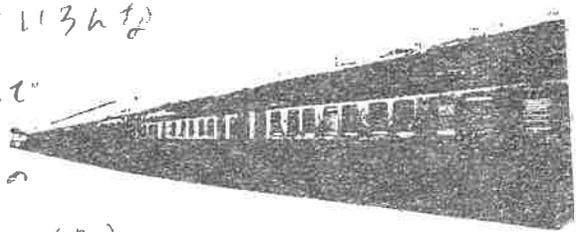


モタレブ



8/17(火)

タツカから汽車に乗って4時間。窓からいろんな風景を見た。スラム、物売り、物こい。腕で前進している人、田んぼ、親子…。私達の目の前では風景がとんとん変わっていくが、彼らにとってはそれが一生。心が痛い。

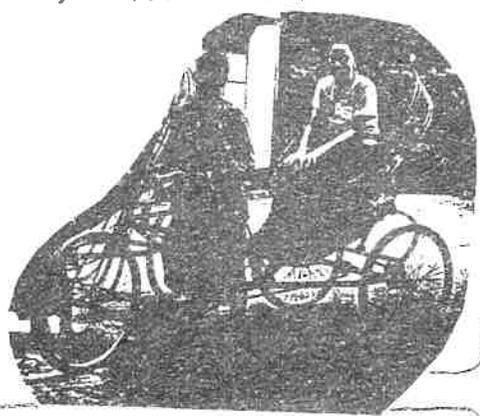


ジャマルゴール到着。いっとちらを見ている無数の目。本当に好奇心旺盛だ。車に乗って30分。わたらのジャマルゴールオアヌ到着。村に案内され、子供達の歓迎を受けた。(ニミが1週間生活する場がある。)

8/18(水)

ジャマルゴール初の学校訪問。先生も子供もタツカの時と比べて笑顔が少なかったが、ハモントさんが教える始めると子供たちの顔がハッピーに輝いた。ハモントさんは教育上手。

午後は庭に遊木に来た子供達とシャボン玉をしたりして遊んだ。夕方マーケットを散歩し、帰りにヌタツのカーンさんのお家におじゃまになる。



8/19(木)

今日は涼子ちゃんの誕生日。ヌタツの人が宝のたまて箱をくれた。前から欲しかったリングも入って、涼子ちゃん感激！そしてつい涙が…。私もつられて。こちに来てからみんな、何かと涙もろい。

午前、午後と2つの学校に行った。午後の学校では初めて一人で子供たち6人をまかされた。言葉も

通いず、ドギマギした。帰り際、村人の輪の中でみんなで歌を歌った。

8/20(金)

金曜日は学校が休日なので朝から boat trip に行った。

ボートの上ではスタッフの人たちにバンクラティシエのラヴソングを歌ってもらったり手拍子したり。陸に上ってからはい走り幅とびの競争！でも少しでも踏み切り線からはみ出したら失格。厳しいな。うまとびの競争もした。熱戦だった。



午後は村の先生が2人来てサリーを着せてくれ、マントーもかいてもらった。みんなそれをかききれいだ、たけど、お化粧のせいで別人のようだった。

朝、ガロへ出発！ガロはマラリア汚染地域と聞いていたので、みんな神経質になっているのかな...と思いきや、車の中で爆睡している人大々数...途中フェリーに乗ったりしてついに昼過ぎ、ガロに到着。そこで私たちはGUEST HOUSEのすばらしい思わずロクんとしました。

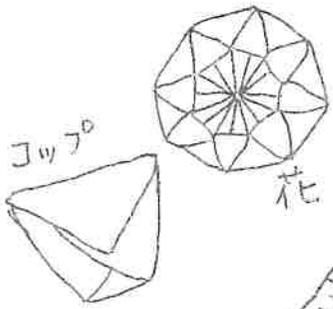
『ベットのがある！シャワーがある！扇風機がある！』
 実はこの喜びもつかの間、シャマルプールと同様に電気はほとんど使えず、また水も止まってしまった。スタッフが急いできて来てくれた水は、なぜか“red water”。市場が遠いので夕食も9:00すぎであった。けれど私たちがどんな困難に対しても『オシビタナイ』のじで乗り越えたのだ。こた。



22日(日)

昨夜の大雨のため、道はぐちゃぐちゃ、川はひざくらいまで達していたが、私たちにいつも通りはりきって出発！途中でどことなく日本と似ている景色や家や人々に出会い、親近感がわいてきた。小は教室のような所で共に礼拝を守り、そのあとお待ちかねの学校訪問々。本日は折り紙 dayで一校目では花と、二校目ではゴップを作った。とくに花は難しいため、20分くらいかけて、汗ばくになりながら考えたが、そのかいあって子どもたちはとても喜んでくれた。私たちはいつしか、ここがガロであることと、マラリア汚染地域であることを忘れ、夢中になっていたのだ。——そして夕方、矢張りすぎる滞在にバツ残りはあったが、私たちは、ガロを去り、シャマルプール々。途中、ジョフィーさんの車の故障やフェリーでの待ちなどまたまた色々あったが、9:00ごろ、なんとか到着。おばちゃんの手で作ってくれたご飯を食べた時、私たちはホッと安心した。

『やっぱりシャマルプールでしょ！
 やっぱりビーチベットじゃないと！』



23 日 (月)

午前中、バンクラテッシュ最後の学校訪問。授業のあと、子どもたちと校庭でいくつかのグループに別れて遊んだ。(wave, ハンカチ落とし, 馬とび, 歌 など) とても人なつこくて、活発な子どもが多々、最高に楽しい時間を過ごした!! — 午後、私たちはおののおの、自由な時間を過ごす。子どもと遊んだり、スタッフと遊んだり、日記をかいたり、一人にたおんだり...。そして夕方、日本食作り開始。

メニューは、天ぷら(かきあげ, かぼちや, 玉ねぎ, なる), 鳥のからあげ, たまごのみそ煮, きゅうりの塩づけ, 魚のあげもの, ごはん, みそ汁である。時間はかかったものの、なんとか完成し、メンバー, SEPスタッフ, おばちゃんみ〜んまで最後の夕食をたべた。

やっぱりごはんは大量で食べると『クモシヤ』でした!! 本当に私たちは、明日帰るのだから...。

(ちなみに、ジョークさんはあまり箸(手)が進んでいなかった。)



24 日 (火)

ジャマルプール出発の日。SEPスタッフと日本から持ってきたお菓子を囲んで最後の sharing をし、少しだけ外で遊んで、スタッフとおばちゃんにプレゼントを渡し、とうとうお別れの時間となった。この景色も、この空気も、この道も、おがかりのうてないピーチベツも、おばちゃん口味付けのごはんも、そして、ジャマルプールスタッフや子どもたち、村の人たちとも、み〜んなお別れなんだなあ...。そう考えると、寂しくて胸がいっぱいになった。本当にありがとう。私たちは、み〜んな大女子だよ。絶対に忘れない。

— 汽車の中で、ジャマルプールでの日々を振り返りつつ、私たちは夢の中。そして 8:30 すぎ、やっと DHAKA に到着!! 他のチームのメンバーと久しぶりの再会をし、ホッと安心。『ああ、DHAKA においで!!』

➡ こうして私たちジャマルプールチームのちょっぴり dangerous な生活は終わりました。最後に... ジャマルプールのメンバー 5人 + 船産先生という最強メンバーに出会えたことに感謝。このメンバーは、ホントにみんな夕方個性手食がたてです。

女責: C.A

ガロ族の人々

船戸良隆

99年夏のスタディー・ツアーでは、二つのことが印象に残りました。

ひとつは、鉄道沿線沿いのスラムのことです。ダッカ行きのパイマン航空の中で、英字新聞にちらっと載っていたのですが、また、ダッカのスラム街が、当局によって強制撤去されたとのことでした。

ジャマルプールへ行く列車が、ダッカ駅を離れると、すぐ両側に凄まじいスラムが見えます。しかし、今回はその家々が無惨にもなぎ倒され、あるところでは骨組みだけが骸骨のように残されていました。

確かに当局がいうように、それは不法占拠でしょう。また、外国人に見られては、恥ずかしいものかもしれません。だからといって、蹴散らすように追い払うのは、どうでしょう。あの方々には、人権はないのでしょうか。いま、どこで、どうしているのだろうか、と思うと、悲しみと怒りがこみあげてきました。

今回初めて、北部山岳民族、ガロ族の村で一泊することにしました。というのは、BDPが、ここに学校を3校建てたからです。

ジャマルプールから北へ3時間。レンタカーとショヒークさんの年代不詳のトヨタで突っ走る。このトヨタがうるさいこと、おびただしい。本人はカッコイイと思っているに違いないが、やたらにピーポー、ピーポーと騒音をまき散らす。ともかく、この車を走らせるというだけでも、ベンガル人の技術力はたいしたものだと、大いに感心する。山へ入ると景色は一変する。平地のバングラデシュとは、全くといっていいほど違う。ちょうど日本の高原に来ているという感じである。しかし、この軽井沢まがいの素敵な別荘地が、たいへん危険なところなのだ。

実は、準備会が終わった後、アルバートさんからFAXが届き、ガロ地区がマラリヤ汚染地区であることが分かった。これをすぐメンバーに知らせるべきか。ずいぶん迷った。知らせれば、おそらく大恐懼をきたすであろう。キャンセルが相次ぐかもしれない。そうかといって、知らせないで、後からマラリヤに罹ったとでもなれば、まさに切腹ものだ。たまたま、電話をかけてきたMさんに、ためしにちょっと言ってみた。案の定「大変、大変」と大騒ぎ。結局、JOC Sの石川医師に相談し、現地で予防薬を服用することで出発とあいなった。

ほとんどの人がクリスチャンである、ガロ族の人々と礼拝を共にできたことは、心からの感激であった。言葉はベンガル語であったが、最後の賛美歌、一曲はマンディー語（ガロ族の言語）で、元気よく歌っていた。ガロ族ただ一人の先生であるアガタさんが、自分の5才になる息子に、「将来、大学まで勉強させて、ガロ族のために働く人になってもらいたい。」と言っていたことが、今でも耳から離れない。



中島 洋恵

ある日の日記より…

「…開発の必要性、文化侵略に対して自分がクリアになれないことへの悩みが私から離れない。この国は確かに貧しい。この貧しさをどうとらえればいいのだろう。…(中略)でも「文化侵略」という言葉が私の頭から離れないのだ。

果して彼らに、私たち自身や西側の要素を知らせたり、教えたりすることは侵略にはならないのだろうか。教育って何だろう？教育の必要性はどこからくるのだろうか？私は完全に混乱している。」 (14/Aug/'99)

「へこんでへこんでへこんでる中での学校訪問。子供たちは私達が来ると立ちあがって挨拶をしてくれる。なんだか泣きたくなくて、切ないし、嬉しいし、愛しいし、自分の至らなさでやりきれなくなるし、もうぐちゃぐちゃで、でもこの子達はすごいキラキラの瞳と笑顔で私を迎えてくれて、私が笑いかけるのを待っていてくれる。やっぱり泣きたくなくなった。泣きそうなほどのくしゃくしゃの笑顔で私も挨拶をした。」 (16/Aug/'99)

「…外国人の私達に人が群がってくる。物乞いの大人や子供たちが。彼らが私に触れ、物を乞う時、私はその人を見ないようにする。目は見ない。そしてズンズン前だけを見て歩く。隣の日本人の子と他愛もない話でもしなければどうにもならないと感じ、話し出す。そして彼らは去って行く。

私は子供たちに会いにバングラに来了。本当に子供たちはかわいくて、私にたくさんのパワーと勇気をくれて、私を本気にさせる。私にとっての子供はそんな存在だ。そして今、確かにここに来て私に物乞いをするこの子だって子供なのだ。子供に会いに来たのに、どうしてこうなってしまうのだろう。

…(中略) 神様、同じ子供なのにどうしてですか。私にできることは何ですか。今、ジャマルプールの1週間を終え、ダッカで一人こうして考えながら日記を書いている、私にはわからない。きっとこのままわからずに続くのだろう。そんな気がする。でも今の私が思うのは、結論とか結果が見えなくても、でもそれでも私がどういう方向を見て歩むのか、これが大切なことなのでは、ということだ。この子達から受ける痛みや神への問いかけを心にもちながら、覚えながら、なんとか自分にできることを、謙虚に神様のもとで考えることがまず必要なのではないか、と今の私は考える。」 (25/Aug/'99)

——バングラデシュでは本当によく泣きました。わからなくて辛い涙、帰りたくて流す涙、自分が嫌で出る涙、感動の涙、嬉しくて出る涙、楽しすぎて出る涙、帰りたくなくて流す涙…などなど。今になれば、全部尊かったのだ、と思います。

これからの夢

森嶋 涼子

今、大好きな風景。

教科書と鉛筆をかかえて、あの子が裸足であぜ道を歩く姿。

今、好きな色。

地平線まで伸びる田畑の緑と、彼らを支える大地の茶色。

今、好きな音。

左手を、揺らすたびに響くチュリの音。

今、伝えたいこと。

豊かだけれど、やはりそこには貧窮が存在していたこと。

今、願うこと。

人が、互いに思いやることができれば。

今、気づいたこと。

人は、決して一人では生きてゆけないこと。

今、恐れていること。

まだまだ自信のない私が、いつか挫けてしまうこと。

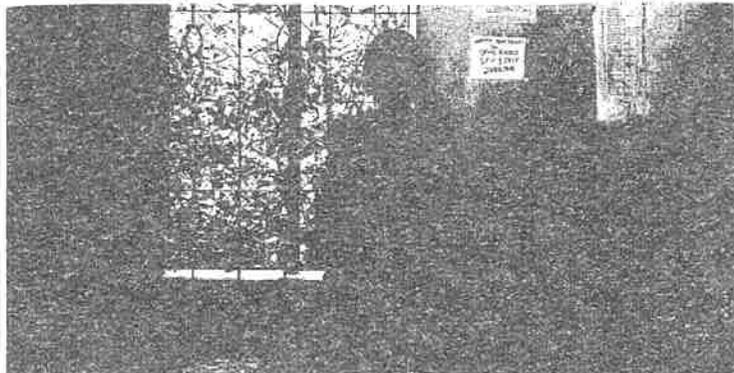
今、うれしいこと。

それでも、“前へ進みたい”と思っている私。

今、一番うれしいこと。

私を見守ってくれる人達が、地球上に存在すること。

だから私は、これから自分の決めた道を歩くだけ。



バングラデシュ、本当に学ぶことの多かった国。でも、それはただバングラデシュに来ただけでは感じなかっただろう。へえ、こんな国があるんだ、と一つの景色として旅の記念の写真におさめることしかできなかったと思う。

しかし、私はシマールポールで良き仲間達に恵まれ本当に様々なことを考えることができた。自分の無力さ、みんなの感受性の豊かさ、それぞれの意見、みんなの子供に対するパワー、思いきりのよさ。そして私は何かに動かされた気がする。それは、例えば「本を読んだら得られるものだろうか。いや、やはり自分が体験し、このツラさを分かち合えた仲間がいたからこそ真実味を帯び、そして自分の考えをも変えたのだろうか。」

—— 8/23 (月) (シマールポールにて最後の晩の日記より)

日本で真剣に悩んでいたこと、他人の目を気にして思い通り動けなかったこと、この国にいとそんな問題じゃないかと思える、ゆっくりとした時の中で、ゆっくりと自分と向かいあうことができた。

バングラデシュで出会った全ての人に感謝し、神様の祝福があることを祈る。



今、目を閉じると、あのバングラデシュでの日々が色あせることなく、鮮明によみがえってくる。

バングラデシュに行けてよかった。あの笑顔に出会えて。大学生生活をただ何となく通り過ぎるのでなく、立ち止まることができてよかった。この機会を与えられたこと、心から感謝したい。

私はこのツアーに参加することで、自分が変えられたら、もっと強く、もっと自由になれたらと思っていた。様々な人の体験談を読み、実際に聞いてみるなかで、わたしも、、、と期待していた。

物乞いをする子供のすがる目、何かを訴える目に絶えられず、じっとしてただ首を振るだけだった小さな、何もできない私。ありのままの私を受け入れてくれたBチームのみんな、SEPのスタッフ。バングラデシュのゆっくりと落ち着いた時の中で、私もまた周りのみんなを、そして自分自身をも受け入れることができた。

私は私のみままで変わらなかった。それでもいいと思う。

たくさんの出会いを与えてくれたバングラデシュ。大切なことを教えてくれた国。私はまだこの国のほんの一部にしか触れていないが、この国が大好きになってしまった。

鈴木瑠理子



私の心の^{変化} in Bangladesh

～安藤千絵美～



日本を立った瞬間 「初海外旅行だ!! 私に飛び立つんだ!!」

↓
DHAKA空港にて 「お願い、私の所にこなくて。私の目を見ないで。物販の子供に出会って 私には何もできないんだよ。お願い、あつかに行って。」

↓
初めての学校訪問 「すごいパワー。貧しさという逆境の中でも、こんなに強く明るく生きている。」

↓
汽車の中からスラム街を見る 「このスラムに神はいるのだろうか。正義とは…。忘れたいけれど、今の気持ち。絶対に。」

↓
農村にて 「緑と茶色の世界。生きて難しいと思っていけれど、本当はとっても Simple なことなんだ…。」

↓
ガロにて 「いつのまにかマラリアのことを忘れてた。だって、子どもも村の人も、普通に生活してる。何も変わらないよ。」

↓
子どもと遊ぶ 「こんなに一生懸命遊んだのは何年ぶりだろうか。」

↓
農村を去る 「ありがとう。こんな言葉じゃないけれど、本当にありがとう。」

↓
マラカール女史と出会う 「感動。感激。体中がゾクゾク震える。私にも、他者のために生きる“ことができる”のだろうか。」

↓
Bangladeshを去る 「頭の中がぐちゃぐちゃ。日本での現実がせまってくる。私にとってバングラとは…。生きて何?」

2週間、私の心の中はいつも、感動、疑問、喜び、悲しみなどのたくさんの感情で揺れていた。そしてそれらすべてが、私の本当の感情で、私の宝物なのだ。

私は、バングラに行って変わったのではなく、今、これから変わろうとしている。スタート地点にいる。

私にどんな力があるのか、何ができるのか わからなけれど、自分の信じた道を、ゆっくり歩いていきたい。

C team in カティラ

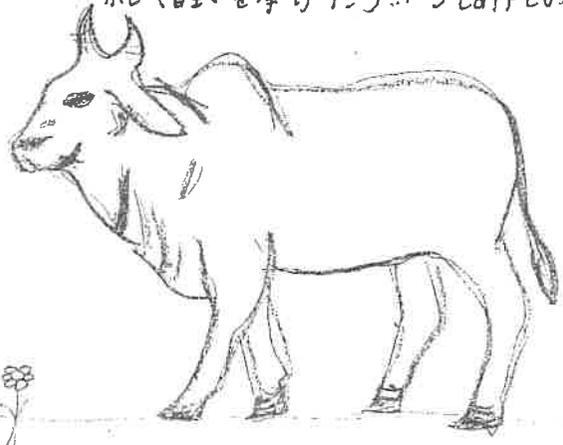
Member紹介

- 井上 儀子 さん
- 江口 明希
- 山根 亜美
- 西村 愛
- 山中 光代
- 伊藤 悦子
- 広田 晶
- 秋庭 江美子

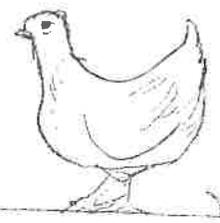
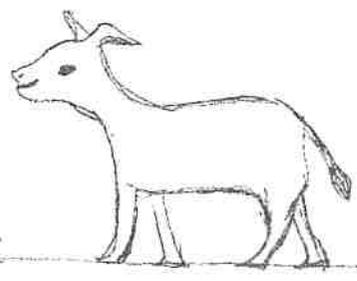
SEPのStaff

- ファル-クさん
- シャゴ-ルさん
- オシエムさん
- ダニエルさん
- バーナードさん
- ジョセフさん
- ビツフロレさん
- ポ-ルさん

Cチームはステキなスタッフに囲まれて、毎日楽しく過ごすことができ、いつも食事の時は笑い声が絶えず、メンバーとStaffで本気でサッカーをして、豪華な商品をもらったり、学校に向かう船の上で結婚式を挙げたり... Staffとの交流が深まったことがすくうれしかったです。



あ



あ



「教育で一番大切なことは何ですか？」



井上 儀子

「えっ！ そんなこと！ 信じられないよ！！」

夜のシェアリングの時間、私たちの話にかティラのスタッフたちは全員顔をこわばらせ、目が止まったままです。私たちは、日本では自殺者が多く、特に東京の中央線では自殺のために頻繁に電車が止まることを話していたのです。ダッカスタッフのファルークさんは、さすが日本のニュースをくまなく読んでいただけあって、「それは真実です。」と冷静な態度。しかしすぐに、子どもの自殺者もあることをあげて、厳しい目を向けられました。昨年へモントさんが来日した折にも、山手線の事故に遭い、電車が大幅に遅れたことを経験したのですが、自殺のためということを知ると、顔を曇らせて言いました。「日本の人は宗教をもっていないのですか？」

バングラデシュでは、宗教は家族単位、村単位で、生まれた家庭がムスリムであればイスラム教、ヒンディーであればヒンズー教となり、宗教のない人はいないのです。学校でも小学校の科目に宗教の時間があり、教科書もあります。それぞれの宗教別に分かれて行くそうです。そしてお互いに尊重し合っていて、インドほど宗教での対立はないようです。私たち日本のメンバーは、バングラデシュで教会の礼拝に出席し、人々の祈りと讃美に触れて感動します。ヒンズー教の寺院に行き、年輩者を尊敬する態度に触れて感動します。そして宗教の大切さを感じるのです。なぜでしょうか。今まで宗教に触れる機会がなかったからでしょうか。宗教について考える場がなかったからでしょうか。日本人は本当に無宗教なののでしょうか。本当は誰もが一人では生きられないことを知っているのではないのでしょうか。

かティラのスタッフたちは口々に言いました。「子どもが自殺するなんて信じられないけれど、そこで手を握り、抱きしめることのできる大人が必要。それは宗教を越えて一人一人を愛する姿勢ではないか。これはSEPの姿勢にも通じます。」きっぱりと言い切るその姿は輝いて見えました。「教育で一番大切なことは何ですか？」メンバーの質問にファルークさんは即座に答えました。「ネガティブからポジティブへと行動を変えていくことです。」私たちは時には、消しゴムで消したくなるような人生もあるかもしれないけれど、ネガからポジへと姿勢を変え、態度を変え、行動を変えていくその力を得たいと思いました。

ダッカに戻った後、マラカール先生は私たちに力強く語られました。「神様に与えられた命を、他者の役に立てるように生かして下さい。私たちの人生は、他者に役立つよう神に与えられているのです。」

バンガラデッシュ *again* チーム 2 ユグチアキ

「アキはまたバンガラデッシュに来ますか？」
一週間の農村での生活を終えてグーカでズレズレに他のチームの子と合流をした。体調を崩してしま、土着者が少なくない中で、皆が、生き生きとした目と笑顔だった。それぞれ途惑いや悩みを抱えていながらも自分が貴重な体験をもち、シェアする事で、自分を見つめ直す事ができたような表情だ。お互いの体験を話し合い、スタッフの方達とも打ち解けた笑顔でのお茶の時間。1人のスタッフが私に問いかけた。少し迷った後にこう答えた。「わからない。」
最上級の真険な答えだった。バンガラでの生活は実際つらい事もたくさんあった。毎食続くカレーに、食が全くすすまなくなった。子供との接し方に悩み、教育の在り方や国についても考えた。結局、答えを出せたものもあつたし、かがえ込んだままのものもあつた。そうしてわかつたのは「自分の力」だった。内面的な強さや現実にはできること、これからはやろうと思える事、ひらくるめて。　　そう続けた、「この国にまたいつ来れるかという事はわからない。でも、ここで学んだ事やSEPのような活動にはずっとたずさわっていきたいと思います。」　　スタッフの人は笑顔だった。



バンブーラティエに 行ってきて

山本 良 亜美



バンブーラティエで感じたことは、まず人々の「力強さ」「生きている」ということだった。これは、単純にリキシに乗っている人や物をいの人、果物のカゴを頭に乗せて売っている人たち...を見たからだ。しかし、ムツカやカティラで過激しているうちに、これ以外にも緑で埋めつくされる大地や村で出会った先生や子供たち、村人、宗教を持つ、ということ...これらからも「力強さ」などを感ずることはできた。設備が整っていないくても一生懸命勉強する子供の姿、着る物が古くて汚くて、食べる物が満足に無くとも笑顔がとて素晴らしい人たち、親切にしてくれるスモールな村のおばさんたち...「美しい国」と聞いていたが、これにとらわれないように物事を見方と考へていた。差別した目で見てはいけないと思った。しかし、なんとこの全くオキシダナだった(問題外)。上記したように、本当に心が広くて大らかだ。私達日本人を快く受け入れてくれた。突き刺さるような視線も日本のように冷たいものではない感じがするに感じた。

バンブーラティエがとて好きになった。無い物ばかりかもしれないと日本に無いものばかりだったからだ。なんと毎日楽しく過ごせたのももちろんSEFのスモールな同じメンバーたちのおかげもあるが、バンブーラの大地、人々たちだ。だから、かもしれない。一見、荒涼としたムツカの街でも、道路沿いにある小さなお店でお茶を飲んでいる姿を見た。仕事が無いだけなのかもしれないけど、どういふのんびりとした部分をちゃんと手ずかしていることや、国民のほとんどが何らかの宗教をもっていることも、心を広くしていられる理由の一つなのだと感じた。宗教はんとよくはものじやないと思っただけで、私の知るは、とてか入行ってしまった。

2週間という期限がきたから帰らなければならないけど、毎日子供たちと遊んだことや、スモールと話したこと、学校を訪問して交流し出したことは本物だ。そしてバンブーラティエという国が私の身近な国になっている。あの緑の大地を思い出しながら、これからどうしよう。

本当にバンブーラと出会えたことはアミクシト。ありがとう。ありがとうございました。

格好いいことを言われると、感動することがある。でも思ったことをただ口にするだけでもっと胸にズンとくることがある。シェアリングの経験で私が知ったことだ。シェアリングは人の話でうずうずして、自分の話の言葉の少なさにもどかしかった。アルバーツさんの“Love to TALK”という言葉の意味がわかった。話すことを愛せば、文章を形成する言葉を愛し、思いや感情も愛するようになる。人間だけしかないこの力を使わない手はない。私は“Love to TALK”という言葉に出会えてよかった。出会えてよかったものの2つめは音楽だ。歌声に手拍子と太鼓のリズムだけで音楽は出来上がる。多分、バングラディッシュの人は音楽を愛している。歌に踊りに手拍子の仕方まで教わった。カティラで私は毎日「歌え」と言われた。あんなに歌ったことは今までなかった。あるメンバーがダッカにいるとき「自分だけどうしようもなくドキドキすることがある」といったのを思い出した。太鼓が鳴るときのあのときめきはどうしようもないドキドキに違いない。死ぬかと思った。子供が私を見て笑っていたので、きっとやばかったんだろう。そのドキドキのせいか、私は特にドル(太鼓)好きのスタッフと約束を交わした。「今度会うときは私にドルを教えセッションする」この時点で私は村から離れたくないという気持ちはなくなり、早く大きく強くならなくっちゃと思い始めた。守れない約束はすべきではない。私はもっと頑固になっただろう。私は来年の進路を決めて帰ってきた。いつかまた出会うために決めてきた。

私は自分に変化があったかはわからない。でもこれだけは言える。私は元気だ。汗だくになって遊び、笑い、歌い、話し、頭がよじれるほど色々なことを考えた。気持ちいいってこういうことだろう。私にはダッカでお気に入りの場所があった。八方ふさがりでマイナス志向だった私が座っていたあの場所にもう一度座って「どうだ私は元気だ」と胸を張ってやろうと思って、皆が「ダッカに帰りたくな〜い」といっている中、ワクワクしていた。強くなってくるのだから後ろを振り返る必要はない。

ダッカに帰ってきた晩、そして最後の晩に私は座っていた。蚊にさされた。ありが登ってきた。そわそわしながら、きっと私はひとり得意気な顔をしていたと思う。今でもきっと得意気じゃないかしら？！



山中 光代

バン格拉ディッシュでの2週間、私は自分らしくいられた気がします。自分の感情に正直でいられました。

よく思い出するのは、やっぱりリカティラでの生活で、私は子供の如くに戻ったみたいで、いつはおい遊ばしました。走ったり、歌ったり、笑ったり、感覚を全開にして精一杯生きていました。それがこんなに気持ちいいことだって気づかせてくれたのは、笑顔のかわいい子供たちや、愛情いつはおいのSEPのスタッフ、個性あふれるメンバーそしてバングラディッシュの自然でした。

彼らは私に本当にいろいろなことを教えてくれました。物質的には何も持っていないけど、心の中にたくさんの熱い思いや願いを持っていた。自分の国を愛し人々を愛していました。だからあんな美しい笑顔で笑っていたのだと思います。そしてSEPの活動は、私に勇気を与えてくれました。私も自分の正しいと信じる道に、自分なりに進んでいきたいと思えます。学ぶべきことはたくさんあります。

すべてのことが今の私の大切な力になっていきます。バングラディッシュの人々との出会いと感動が私を動かしてくれたんです。本当に、本当にありがとうございます。



バングラデシュで学んだこと

伊藤悦子 25

私は今回のスタディーツアーで本当に沢山のことを感じ、学ぶことができましたが、その中のいくつかをあげてみようと思います。

●農村での滞在中、私を含め多くのメンバーが「こんなに楽しくて、いいのだろうか」と楽しむことへの罪悪感を感じていました。それはもちろんスタディーツアーだからというのものもあるけれど、私の場合「バングラ」
「世界最貧国」に対する暗く重いイメージがそうさせるのだと思います。日本で「バングラデシュ」と聞くと「貧困・災害...」すぐ子供達の飢えた写真が頭にうかんでいました。でも実際彼らは確実に生活して、そこには沢山の笑顔、愛情、音楽が存在するのです。私はそんなあたりまえのことを忘れていました。同時に日本で得られる発展途上国に対する情報のほとんどが「暗いものばかりで援助される国」というイメージを植えつけてしまっていることにかかりました。本当に行って、生活してみないと何もわからないんだ、そう思いました。しかし今回私が知るこゝが「できたのはほんの一部、一側面には過ぎません。私達にはるるの食卓、車、宿舎すべてが与えられていました。後から聞いた話ですが、毎食米とカレーには肉や魚が「ついて」いました。でもそれは特別に豪華の為に用意してくれたもので、普段はSEFスタッフの方たちも肉や魚は週に1度しか食べられないのだそうです。<シャウワ>でした。私は一本「バングラデシュの何をわかった」というのころうじけました。

●私は地域文化を勉強していますが、今日のツアーは「異文化理解」についても勉強になりました。どうしても自国の文化と比べて「これは理解できない、変だ」と考えてしまいます。だけどそれぞれ本当に異なった歴史や文化を持っているのです。日本との比較でその国をとらえるのではなく「バングラデシュ」としてとらえることの難しさを痛感しました。何度も何度も、わかっているのに「日本」というフィルターを通してしか理解することのできないことへのジレンマを感じました。

●今回のツアーは本当に心から楽しむことができました。私は「楽しむこと」がとっても大切だと思っています。バングラデシュが大好きになれたから、あの後歩き人達が今抱えている問題をいっしょに解決していきたいと素直に思えたから。2週間という時間はあという間だったけど、私の心の中の時間はずっと続いていきます。これで終わりじゃない。ここからが本当のスタートなのです。私なりの方法で「バングラデシュ」にずっと関わり続けていきたいです。

ありがとう

バングラデシュ



バングラデシュでの発見

広田 晶

バングラデシュでは本当によくしゃべった、泣きもしたし、笑いもした。いま、日本に帰ってきてこうやって報告書を書くにあたって本気でなにを書いたら良いものか悩んでいる。本当に色々な発見があった。なにから書いていいものか。では、文化面でのことから。日本とは違う文化が沢山ある。私はバングラデシュの文化は理解できなかった。でも、大切なのは理解することよりも認めることじゃないだろうか？これは重要な発見だと思う。あと、私にとってもっとも大切な発見はキリスト教だ。今までの自分の意地みたいなのが見事になくなった。締め切り寸前(当日)にACEFのことを知り、速達で作文を送ったことも今思えば、キリスト教でいう神のお導きだったのかもしれない。キリスト教には良い意味でしてやられたという感じで、いま教会に日曜日に行っている自分は誰なのかと思うこともある。なんだか良く分からない報告書だけれど、とにかく本当に大きな発見が沢山あった。ここに書くと、今までの自分の人間性を疑われるような発見、つまり当然のことが当然のこととして考えられる、そんな私なりの発見もあった。多くの発見と友達(ほとんど年上なので友達と言って良いものか分からないけど)本当に予想外の収穫が得られた。行ってみなくちゃ分からない！まさしくそうだと思う。ちなみに私はカメラ等持っていかなかったので物証はない。でも、目を閉じるとはっきりバングラデシュでの笑顔、バングラデシュの景色が浮かんでくる、スラム街、痩せた子供も一緒に。忘れてはいけない、忘れられないことを日本に沢山連れて帰ってきた夏だった。



右下

ありがとう

秋庭 江美子

バンクラデッシュ、私にいろいろ教えてくれました。

自分に自信がなく、将来どうしていいのかわからなかった、私がこのツアーに参加して、自分がなにをしたいのかがわかり、バンクラデッシュの大人、子供達に「こんな勉強のじゃない私ども、人のために生きることほできるんた!!」と教えてもらい、私がお忘れかけていた「人は人々を助けて生きていく」そのことを改めて思い出しました。

毎日あった、聖書の勉強、ディスカッションで、「神様はいつも私を応援し、助けて守ってくださっている」この力のわく言葉、今まで考えることとめまらしたからだったのが、物事をよく考えるようになりまし。

いろいろなことにきあがしてくれたバンクラデッシュ ツアー
ありがとうがございました。



フーバイル Aチーム

- * Staffのみんなが「ドスト」といって親密に接してくれた。異和感なく、自分が日本人なのを忘れるくらい親しくなれたのがうれしかった。
- * 最後の日に、いつもふざけていた Staffが 真実的な表情で、バンブラテッシユの問題を大きくかかえこまないと、1つずつゆくり考えていってほしいと言われたのが心に残った。
- * 農村の人々が私たち日本人に温かく接してくれることから SEPの活動、ACEFの活動が根づいていることに気づかされた。
ダツカに帰って来て、農村での生活が夢のように感じてしまうのがすこく仲良かった。
夢ではなくて現実なんだから余計忘れにくい。
- * いろんな人と話す中で、「日本人はすこくリツクでいいですね、幸せですね」と言われたことに考えさせられた。
- * 自分がバンブラテッシユに何ができると聞いたら、Staffの人に、「あなたはまずバンブラテッシユで自分を見つけなさい」と言われたことが心に残った。
- * 自分たちの価値感について考えさせられた。村の人同士の関わりが温かかった。

シヤマルポール Bチーム

- * すこく体的にハードだったけど、精神的には安定していた。
5人の人が欠けてもダメ。5人がお互いもっていない部分をうめ合わせることでできた。
- * 一週間電気のない生活。いかに今まで物にたよってきたか思い知らされた。
いままで難しく考えすぎていた。すこく単純なことで感動できた。
自分たちがどういう方向に進んでいくかが大事。
- * 今まで引こみ思案で人が行動するのを待っていたけれど、周りのみんなのように主体的になりたいと思ったのが一番の4又獲。
- * 電気のない生活がみんなホッピライブに考えていて苦じゃなかった。
こんな所で人が暮らして行けると思うと自信がいった。
言葉が通じなくてつらかったけど、子供たちが一生懸命「I love you」と言い続けてくれたのがうれしかった。

* 船戸先生と Dr. マラカール先生が「やっつこことか」こんなに大きなものになったのがすごいと思った。自分が正しいと信じたことにつき進めば、周りがついてきてくれることに感謝重カした。

カティラ Cチーム

- * みんな楽しもうとする力がすごくあつた。子供との交流がかなりあつた。1人1人が個性を出しあつていい味がでていたと思う。
- * SEPの学校の先生達の教え方がどの学校も子供たちの興味をそそる感じがしてよかったと思う。子供たちが本業に伴件と楽しそうに勉強する姿が忘れられない。
- * SEPのスタッフ達の気がいいや、思いやりに包まれて、すごく楽しむことができた。楽しむことの大切さをみんな感じていた。SEPのスタッフから本業にいろいろなことを学んだ。
- * SEPのスタッフや農村で暮らす人々から本業におおくのことを学んだ。感謝の気持ちでいっぱいだった。

8/26 Pilbertさんの私たちにへの最後のメッセージ

- 。長い年月を経て、私たちの心で理解してほしい。
- 。バンクラと日本の文化の違いを、社会学者のようには解決するのではなく、違う国で違う生活とすることによって、自分の国と、自分の日々の生活と見直し、自分が何をしなければならぬのか、神様が与えてくれた能力とどう生かすのか、考えしてほしい。
- 。この2週間を単なる memory にするのではなく、実際に関わりしてほしい。

Presentation on SEP

34

- アルバートさんの話で一番印象に残っているもの。"私たち日本人には多くの選択権があるが、バングラデシュの子供たちにはただ一つのチャンスしかない。私たちに、私たちのチャンスな、能力を人々のために使って欲しい"と言われたこと。
 - バングラデシュでは、人口の52%が貧困で識字率が50%に達していない。また100人の子供の中で小学校に入学できるのは80~90人、その後10年の教育を受けて卒業できるのは100人中2.5人である。
 - SEPの活動の1つとして、学校の無いところに住民と相談して学校を建設して教師を派遣する。10年前に始めた時は300人だ、た子供が、現在では8000人に増えている。
 - SEPの子供たちは普通の子供たちと少し違い。ほとんど"がたいへん収入の少ない家から来ている。母親は朝早くから働き、父親は母親につらくあたる。子供たちはそのため学校が終ったら働きに行かねばならない。(8~12才)
-
- スラムには障害をもった子供も多くが、そのよりの子供たちのための専用施設はとて少ないために普通のクラスに入り、てもらい。そして他の子供たちと一緒に教育していくことで社会性を育てていく。
 - 子供たちに子供らしさを取り戻したい。父母が貧しいために子供たちが働いて家計を助けなければならない。そのため子供たちはいつも精神がつかれている。

◇ マラカル先生のお話

(★ バングラデシュの現状(物こいの人、貧富の差、スラム街、あまりにも日本と違う様なこと)を見て混乱している私達に対して ...)

みなはバングラデシュと日本を対比しているようだが、歴史的・政治的背景が違うのだからそれはできないのではないだろうか。バングラデシュはイギリス、西パキスタンによって支配をうけたという過去、教育をうけられないなどの現実がありこれら多くのことが重なりあって国の形体を困難にしているのだ。

(★ 私たちにできること...)

SEP schoolの子どもたちから得たもの、我々が見たものの中から、どういう方向を見るか、どういう方向へ行くかが大切なのではないか。お互いにお互いのことを共に考えあうというのが重要ではないだろうか。

神様が1人1人をつくられた目的がある。それは他者のために働くということだ。人生の終りを向かえた時、他者のために生きたか？ これによって真実の満足を得られる、幸せを感じるのだ。

(★ マハトマ・ガンジーの言葉)

「この世界には世界中の人々が満たされる資源はある。
しかし、貪欲を満たす資源はない。」

(★ 最後に...)

ここで得た経験は、何が重要であるかの指針になる。
一番大切なのは、共に分かちあう、share することだ。

◇ マラカル先生の御様子

マラカル先生は時折感情的になりながらも私達に語り、くれた。

年を重ねた者が持つ威厳さに満ちあふれ、存在感が人一倍あり、慈悲深い方だった。彼女が発する一言一言には重さと深みがあり、決して忘れまいと思った。

編集後記

編集委員は全員東女だったので、スムーズに行くかな... と思いきや、みんな忙しくてなかなか予定があわなかったのが、大変でした。でも、これを読んだら、バングラでの日々に戻れるのでは、と思います。

安藤 千絵美

日本での忙しい毎日の中、みんなで集まって編集するのはなかなか大変だった仕上げのめどがついてホッとしている。

木岡 友紀

バングラデシュでの経験を、一人一人の思い出として終わらせるのでなく、編集を行うことで1つの形にできてよかった。この体験記が、これからバングラデシュに行く人の参考になれば... と思う。

鈴木 瑠理子

編集を通じて、夢心地だった気分から“現実”へ引き戻されたような気がしました。一緒に2週間を過ごしたメンバーが、これからも何らかの形で、バングラデシュとつながっていて欲しいと思います。

関山 瑞恵

今、改めて振り返ってみて、バングラでも経験・気持ちを表現することの難しさを改めて感じました。でも、すべて真実の経験だし、単なる思い出としてはいけないということ強く感じ、考え直してみるにはとてもよい機会でした。自分の中にあるさまざまな感動・気持ちをこれからも決して忘れることのないよう、これからの毎日や自分の考え方を見つめ、自分自身の原動力としていきたいと思っています。

武田 まるみ

編集の仕事は思ったより大変で難しかったけれど、忙しい中でバングラデシュのことを考える時間が持てて、すごくよかったです。

山中 光代

バングラデッシュでの思い出を文字にするのは、難かしかつけど、様々なことを思い出し考えることができてうれしかった。

山根 亜美

第17回ACEFスタディーツアー参加者名簿('99.8.13~8.27)

[Aチーム (プーバイル地区)]

- | | | | | | |
|---|-------|----------|-------------------------|---------------|------------|
| 1 | 丹羽 輝子 | 325-0303 | 那須郡那須町大字高久乙字遅山3375-1141 | 0287-78-0023 | 社教保育連盟 |
| 2 | 小林 敬久 | 370-0076 | 高崎市下小埜町996 | 027-343-9838 | 共愛学園前橋国際大学 |
| 3 | 川那恵美子 | 167-0035 | 東京都杉並区今川2-24-1 | 03-3396-4749 | 東京女子大3年日本 |
| 4 | 神谷 明子 | 190-0003 | 立川市栄町5-16-26M栄103 | 070-5582-5083 | 東京女子大2年言語 |
| 5 | 田島由紀子 | 277-0851 | 柏市向原町3-9-501 | 0471-43-6430 | 日本女子大2年現代 |
| 6 | 関山 瑞恵 | 214-0021 | 川崎市多摩区宿河原6-11-2 | 044-922-8254 | 東京女子大1年史学 |
| 7 | 武田まるみ | 167-0041 | 東京都杉並区善福寺2-22-1東女大西寮 | 03-3395-7394 | 東京女子大1年英米 |

[Bチーム (ジャマルプール地区)]

- | | | | | | |
|---|-------|----------|----------------------|--------------|---------------|
| 1 | 船戸 良隆 | 359-1132 | 所沢市松が丘1-20-2 | 0429-25-4685 | ACEF事務局長 |
| 2 | 中島 洋恵 | 275-0025 | 習志野市秋津1-3-3-307 | 047-453-7239 | 明治学院大4年国際 |
| 3 | 森嶋 涼子 | 180-0002 | 武蔵野市吉祥寺本町2-32-13-403 | 0422-20-9884 | 東京女子大3年コミュニケー |
| 4 | 木岡 友紀 | 167-0041 | 東京都杉並区善福寺2-22-3東女大楓寮 | 03-3395-7392 | 東京女子大2年地域 |
| 5 | 鈴木瑠理子 | 167-0041 | 東京都杉並区善福寺2-22-3東女大楓寮 | 03-3395-7392 | 東京女子大2年 |
| 6 | 安藤千絵美 | 279-0026 | 浦安市弁天2-28-9 | 047-353-1880 | 東京女子大1年地域 |

[Cチーム (カティラ地区)]

- | | | | | | |
|---|-------|----------|----------------------|--------------|------------|
| 1 | 井上 儀子 | 331-0042 | 大宮市奈良町97-46 | 048-668-2942 | ACEF事務局 |
| 2 | 江口 明希 | 175-0082 | 東京都板橋区高島平3-11-4-1006 | 03-3938-3306 | 東京女子大3年日本 |
| 3 | 山根 亜美 | 206-0001 | 多摩市和田1591サニーレスト405 | 042-373-5892 | 南多摩看護専門学校 |
| 4 | 西村 愛 | 132-0035 | 東京都江戸川区平井3-4-2-406 | 03-3681-9304 | 青山短大児童教育 |
| 5 | 山中 光代 | 167-0041 | 東京都杉並区善福寺2-22-1東女大西寮 | 03-3395-7308 | 東京女子大1年史学 |
| 6 | 伊藤 悦子 | 192-0913 | 八王子市北野台3-4-10 | 0426-35-7501 | 東京女子大1年地域 |
| 7 | 広田 晶 | 233-0001 | 横浜市港南区上大岡東3-10-14 | 045-842-9273 | 県立清水ヶ丘高校3年 |
| 8 | 秋庭江美子 | 590-0141 | 堺市桃山台1-3-36-106 | 0722-96-8256 | 聖家族女子校3年 |

[ACEF物品仕入れチーム]

- | | | | | | |
|---|-------|----------|---------------|--------------|-----------|
| 1 | 桑山 道代 | 198-0023 | 青梅市今井2-1054-5 | 0428-33-3780 | ACEFバザー委員 |
| 2 | 渡辺 啓子 | 297-0001 | 茂原市七渡9-8 | 0475-24-7709 | ACEFバザー委員 |

<バングラデシュに寺子屋を贈ろう。>

- ☆ ACEFの会員になりましょう
 - ・団体会員：年額1口 50,000円
 - ・個人会員：年額1口 5,000円
 - ・学生会員：年額1口 2,000円

- ☆ ACEFに献金しましょう
 - ・クリスマス献金（金額は自由です）
 - ・一時寄付金（年間いつでも結構です）

- ☆ アルミ缶回収と献金にご協力ください（年間いつでも結構です）

郵便振替 00100-0-185540

アジアキリスト教教育基金

〒169 東京都新宿区西早稲田2-3-18-26

☎ & FAX. 03-3208-1925

< 学校の子供達と一緒に >



子供達に囲まれて



「ハイヨ ハイヨ ハイヨ・・・」おおきなかぶの熱演



「マイム マイム マイム マイム・・・」広い校庭で一緒に遊ぶ



おもちゃのちゃちゃちゃ 「あ、間違えた」



「ここ どう読むの」



パキ (鳥)



コルゴッシュ (兎)



「折り紙教えて」



一緒に勉強 「むずかしい」